授業のヒント

書写

―第１回―

毛筆で文字感覚を確認しよう

安田女子大学
谷口　邦彦

書写授業で何を学ぶ？

「書ければいいよ」「読めればいいよ」とは、中学校の現場にいた当初、生徒からよく聞いたつぶやきである。ここには、授業への子ども達の「あきらめ」の気持ちがこめられていたのだろう。学習への意欲がわかない、学習目標が見いだせない、学習の成果が見えない、などの問題点があったに違いない。

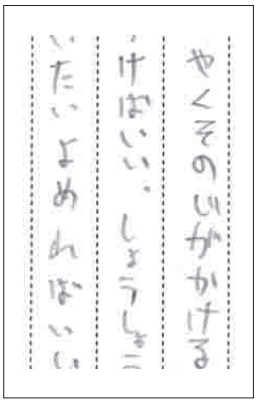
筆者の実践に限らず、本来の子どもの学びから離れて書写授業をしてはいなかっただろうか。説明・示範・毛筆練習・加朱添削・清書という形式的な授業展開に終始してはいなかっただろうか。また、各種コンクールに出品するための時間に充ててはいなかっただろうか。

書写学習とは、日本語の文字を正しく、整えて、読みやすく、速く書く力の育成。そして、これらを工夫して書くことを支える文字感覚を育成することなのではないのか。また、根本となる認知能力の育成、運動能力の育成も欠かせない。新しい学習指導要領においてもこの点は変わらないようである。

三回にわたり紙面を提供していただくことになった。子どもは書写授業を通して何を学ぶのだろうか。筆者の拙い実践をもとに、何かしらの提案ができれば幸いである。

ある生徒の書き文字から

新学期を迎えた四月の中学校。A君という次のような文字を書く生徒が入学した。漢字をほとんど使わないのは愛嬌として、全体として稚拙である。後のことだが、保護者から何とかしてもらいたい旨の申し出があり、個人指導を行うことになった。



書くところを仔細に見て即座に感じたことは、文字を書くということがわかっていないということである。文字が文字として形作られるためには、点画の適切な組み合わせが必要である。一応の点画は揃っているが、その一点一画が本来の点画とは違う。

原因は案外すぐに見つかった。A君は、文字を「線の組み合わせ」でできていると勘違いしていたのだ。なかなか先生方に理解していただけない部分なのであるが、これはかなり重要なポイントであると筆者は大真面目に思っている。

少し詳しく説明しよう。点画は硬筆筆記用具を用いて書かれると「線」には違いないが、文字はもともと〈筆〉で書かれてきた長い歴史がある。〈筆〉は硬筆筆記具とは異なり、筆圧の調節により太さを自由に調節できる利点があるとともに、通常ある程度の太さを維持しつつ、書かれた点画は〈面積のある「形」〉

として表現される。

授業で意識化したいこと

イメージしていただきたい。例えば横画の場合、右手でごく自然に筆を下ろし、引くと横に細長い平行四辺形の「形」ができる。縦画の場合も同様に、縦に細長い平行四辺形の「形」ができる。他の基本点画もすべて〈面積のある「形」〉となる。

このことを確かめることは、技能的には小学生でも可能であると考えている。実際に小学校五年生で実践した時はクラス全員が理解できた。また、筆を初めて持った外国からの中学生にも短時間で実践できた。

まず、学習指導書のワークシートに用意されている、課題文字の輪郭のみ示されたものを使用し、それをなぞり書きしていく。この時大切なことは、輪郭の形を一回で〈塗りつぶす〉気持ちで書くこと。留意することは、筆の軸を手前に倒しすぎないようにすることのみである。具体的には次の手順で行う。

① 点画ごとに、筆の先（穂先）が通るところをあげさせる。

② そのことの規則性に気づかせる（穂先は点画の縁を通ること）。

③ 規則性からポイントを抽象化する（点画によって穂先の通ることころは決まっていること）。

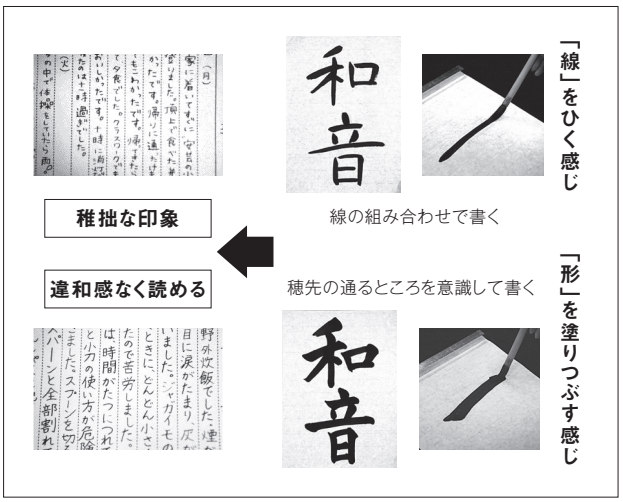
硬筆筆記具に転移させる

点画を一回で〈塗りつぶす〉気持ちで書こうとすると、筆の軸は多少〈ひじ〉の方向に倒れる。横から見て60°くらいがちょうど良いことに気づくだろう。この角度は鉛筆などの硬筆筆記具の角度と一致する。

鉛筆などの硬筆筆記具で書写する場面では、毛筆で書いたときの〈塗りつぶす〉気持ちを想起させることが大切である。書かれた点画は線にしか見えないが、点画の「形」をイメージさせ、塗りつぶしている気持ちで書いていることを自分で確かめさせる。〈塗りつぶす〉気持ちで書くと硬筆筆記具の角度も60°程度となり、筆記具の持ち方までもが修正される。

シャープペンシルやボールペンなどの硬筆筆記具に慣れ親しんでいる我々は、本来「形」の組み合わせで書かれていくべき文字感覚を忘れてしまっている。丸文字などかつて若者の間で流行した書き方の根底にはこの感覚の喪失があり、「線」の組み合わせで書かれた違和感からくる読みにくさによって受け入れられなかったのだ。「線」の組み合わせで書かれる文字には、マイナス面がいろいろ含まれていると言えよう。

毛筆を書写の授業で用いる理由は、大きく書いて学習するポイントを確かめることにある。このことに異論はない。以前は当たり前だったことを授業で扱わなければならない虚しさはあるが、先入観や形式は捨て、学習者に目を向けると、今解決しなければならない課題がいくつも見えてくる。



たにぐち　くにひこ　安田女子大学准教授。広島大学附属中・高等学校教諭を経て、〇三年度から安田女子大学勤務。おもに、書写書道の学習内容、方法の改善に関する提案を行っている。